
幽霊坂の向日葵

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊坂の向日葵

【Nコード】

N9486H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

私は坂を登っていた。貴方を失うと思わなかったあの一年前と同じ日に。坂を登りながらこみ上げてくる追憶の日々。私は登る。貴方のいない世界を終わらせる。そのために。

真後ろから後頭部を焦がすように照りつける日差しが痛かった。額から噴き出した汗が首筋を伝い落ちていく。

私はそれを首にかけたタオルでぬぐいながら、頂上の見えない坂をにらみ付けた。

屋気楼に揺らぐ石畳の上には逃げ水があり、その先に続く青空すらも歪んで見える。

蝉の音は先ほどまで頭の中で反響するほどだったのに、さすがにこの暑さのせいか、はたまた時間帯のせいなのか、今は全くしない。去年、彼と訪れたときもやはり蝉の声など聞かなかったな。私はそんなことを確認するように思い出しながら、足を一度止め、大きく息をついた。

この町では知らない人はいない有名スポット、幽霊坂。私は貴重な夏休みの最後にここを一人で上っていた。

坂の名前の由来は、さまざまだ。

一つには勾配に関係するという説。

この坂は、始めこそ緩やかだが、途中からくねくねと道を蛇行させつつ徐々にきつくなって行く。と思えば急にまた緩やかになりもする。その変則的な繰り返しが続く上に、距離が非常に長い。そのせいで上るものは平衡感覚を狂わされ、眩暈を覚えることがある。

もう一つは、この坂を上りきるまでに一度も振り向かないでいると、頂上で死んだ人に会えるという昔話。

この二つが有力な説とされていた。と、彼が言っていたな。

私はまた去年のことを思い出す。

左右を長い塀に挟まれているせいで、景色がほとんど変わらない。右手が墓地で、左手は馬鹿でかい寺の敷地ということらしいが、その様子は塀が高いためにようとして伺えない。これは坂の真ん中あ

たりから天辺までつつくので、ややもするとずっと同じところを歩いているような感覚にさえなる。

ぐにやり、世界が歪む。

吐き気を覚え、私は顔をしかめながら腰に下げたペットボトルのキャップをひねった。とつくにぬるくなっている水は、爽快感こそ与えてはくれなかったが、干からびそうな体にはそれでもありがたかった。

肩に食い込む馬鹿でかいカメラが恨めしい。

彼の愛用品だったものだ。譲り受けたばかりの頃は、私の人より小さな手に余り、またピントも手動であわせねばならなかったので、なかなか上手く使えなかったが、この夏休暇中ずっと使い続けた成果もあって、今では現像に出しても恥ずかしくない程度の写真は撮れるようになっていた。

「あと、一枚」

私は坂を見上げる。

彼と過ごした場所を一つ一つ巡る旅も、これで終わる。

そして、同時に、私の時間も……。

目を閉じた。

まだ収まらない荒い呼吸と、一ヶ月前、別れを私に告げた彼の声が重なって聞こえる。

私の大切な人。

私の未来。

私の全てだった……彼。

一年前、二人でここを上った時は、こんな日が来るなんて思わなかった。

一人ぼっちでこんな乾ききった不可解な坂道を上らないといけなくなるなんて、これっぽちも想像してなかった。

「無理だよ」

呟きが、自分を追い越していった風の囁きなのか、自分のものなのか、はたまた幽霊坂の幽霊のもののかはわからない。

ただ、生まれつきネガティブな私は、やはり一人で歩き続けることはできないように思われた。

目を上げた。

坂の上で何か黄色いものが揺れているように見えた。

目を凝らすも、噴き出す汗が目の中に入り込み中々ハッキリしない。

行こう。とにかく、最後の一枚を撮り終えるまでは。

私は再び、焼けた石畳の上を、一人歩き始めた。

-

「大丈夫、大丈夫、何とかなるって」

彼の口癖だった。

初めて彼に会ったのは、会社の入社式。同期としてその場にいた彼は、社員章を家に忘れてきて半泣きだった私にそういつて笑った。私は生まれつきネガティブ思考だったせいもあって、これが会社の人間にバレたら入社早々首になるんじゃないかという想像をし、比喻ではなく本当にひざを折りそうになっていた。

そんな私を誰よりも早く見つけたのが彼だった。彼は「こんなことくらい、大丈夫」といつて私を励まし、それでも不安をぬぐえない私に、最後には自分の社員章を無理やつけてくれたのだ。

案の定、入社式の後、彼は上司に社員章をつけていないことがバレ、こっぴどく叱られていたけど、帰り、彼を待っていた私に笑いながら

「これで俺、上司に顔を覚えてもらえたし、ラッキーだったよ」と言つてのけ、ついで

「こんな可愛い子とも知り合いになれたしね」
なんて付け足してくれたのだ。

それから、なんとなく私たちの距離は縮まっていった。

「どうせ私なんて」

私の口癖だ。

それを口にするたび、彼は不快な顔一つせずに

「君だからこそ」

といいなおしてくれた。

「きつとうまくいかない」

そう言えば。

「絶対うまくいくさ」

と返してくる。

「どうしよう」

とこぼせば

「どうにかなるよ」

と笑ってくれた。

実際はどうだったかというと、結果はうまくいったり、そうはいかなかったりの五分五分だったのだけれど、たとえ失敗に終わったとしても「あら、次頑張るしかないね」とはにかむ彼の笑顔にいつも救われていた気がする。

私たちは二人で色んな場所に行った。

彼は私に色んな世界を見せたいのだといった。

写真が趣味で、二人で色んな場所を撮ってまわろう。日本中いや、世界中を二人の足跡で埋め尽くそう。そんなことをよく言っていた。

私は初めて幽霊坂を登った時も、彼にこう尋ねた

「で、全部撮り終えちゃったら、どうなるの？」

果てがある付き合いのようで、怖かった。もしかしたら、この幽霊坂が最後になってしまふんじゃないだろうか。理由のない不安は自分のなかの自信のなさから湧き出るものだと自覚していても、聞かずにはおれなかった。しかし、それにも彼は夏の日差し以上に眩しい笑顔で

「その時には始めの場所が変わってるよ。また、新しくなったその土地にもう一度一緒に行けばいい」

と事も無げに言ってくれたのだった。彼の後ろで揺れる向日葵の橙が優しかった。

私はいつもネガティブで、彼はいつもポジティブだった。

光と影のような二人。私はいつも彼の重荷になっていないか心配だった。それすらネガティブな思考だとわかりつつも、このままじやいつか捨てられるんじゃないかって、怖かった。けど、性格は簡単に変えられるものでもなくて……。ううん。甘えていたのだろう。こんな私でも、いいって言ってくれる、そんな彼の明るさと強さに。

そんな彼の態度が急に変わったのは、去年のクリスマス前。年末の足音が聞こえ始めたときだった。

急に彼からの連絡が途絶えた。

着信拒否はされてないが、電話をかけても「電源が落ちているか、電波の届かない……」といった音声ガイダンスが返ってくるばかりでまるで繋がらない。メールの返信もなく、不安に思っている矢先、会社でも彼を見かけなくなった。彼の上司に尋ねると、長期休暇をとったとの事だった。

付き合い初めて二年経っていた。

合鍵こそ持っていないが、彼の部屋には何度か泊まったことはあった。でも、すぐにその部屋に押しかけるのは気後れがした。

いくら彼女とはいえ、彼が理由を言わずにこちらを避けている以上、待つべきだと思っただし、彼なら黙っていなくなるだけではないだろうと信じていた。いや、信じたかった。

本心は、他の女ができたのではないか、借金などのトラブルに巻き込まれたのではないか、そんなよからぬ想像ばかりが渦巻いていたのだが、なんであれ、同じ会社なら、いつかは会えると思っていた。その時にわけを聞けばいいのだと……。

しかし、彼は私に沈黙したまま、三月に会社を辞めた。

慌てて彼の部屋に走ったが、遅かった。そこには彼のいた形跡すらなくなっていた。

その頃、同期の子に妊娠していた子がいた。絶望に目の前が真っ暗になっていた私に、寿退社を控えたその子から、ある情報がもたらされた。

病院で彼と腹の大きな女性が一緒にいるのを見たという情報だった。

私は生まれて初めて頭に血が上るのを感じた。やっぱり、女ができたのだ。そして、その女に子どもができ、一緒になるつもりなのだ。きっと、会社は私がいるから居づらくて辞めたのだろう。なにが、一緒に世界を見て廻ろうだ。なにが、写真を撮ろうだ。馬鹿にするにもほどがある！

気がつくと、私はまだ就業時間中だったにも関わらず、会社を飛び出し病院へ向かっていった。

どうしようとか、どうしたいとかわからない。とにかく、彼の顔を一目見て、何か言ってやらないと気がすまないと思っていた。

人を散々持ち上げるだけ、持ち上げて。期待させるだけさせなくて、こんなにあんまりじゃないか！

教えられた病院は、市内の大学病院だった。飛び込んだロビーは広く、たくさんの人間が蠢いていた。

私はすばやく視線をめぐらせると、受付に飛びついた。きっと、このときの私の顔は酷かったはずだ。

寒さと怒りに青ざめ、目は涙で充血し、髪は振り乱れている、走ってきたせいで、息もあがっていた。

病院の受付の女性はそんな私を見て、一瞬ぎょっとした顔をしたが、すぐに平静を装って用件を尋ねてきた。

私は彼の名を口にした。

今思えば、もし、本当に彼が妊婦の付き添いであれば、調べられるわけがない。でも、そのときの私は、この目の前のすまし顔の病院関係者に聞けば、彼の居場所が簡単にわかるものだと思い込んで

いた。

その時だ。後ろで声がしたのは。

「貴女、もしかして……」

腹の大きな女性だった。

女性は目を丸めながら私の顔をじっと見て、私の名を口にした。

そして、申し訳なさそうに眉尻を下げると

「貴女の話はよく聞いてます。あの、もしお時間があるのでしたら……」

丁寧な口調でそう申し出てきた。私は返答に困り、しばしその女性を見つめることしかできなかった。

私は女性と病院の喫茶店で向かい合っていた。

女性の腹はすでに十分大きく、もう臨月を迎える頃なのではないかと思われた。

自分はそんな前から嘘をつかれていたのかと思うと、怒りよりもむなしさがこみ上げ、熱が徐々に下がっていった。

「何度も連絡するようには言っただんですけれども、心配したでしょう。ごめんなさいね」

女性のその物言いに、上から目線を感じ、むっとする。どうせ、あんたは勝ち組で、選ばれた立場だ。こっちの捨てられた身を案ずる余裕だってあるよね。そんな皮肉さえ心の中で毒ついた。

とはいえ、自分でもおかしくらい心は静かだった。

たぶん、目の前にすでに大きくなっている腹が大きな理由だろう。彼のことも憎いし、彼を奪い私に惨めな思いをさせる優しさを、無神経にばら撒くこの女はもっと憎いはずだった。でも、お腹の中の命だけは、不思議と憎めそうにもなかった。

だから、私はじつとその大きなお腹に話しかけるようにそれを見つめながら、口を開いた。

「彼は……」

「病室にいるわ」

「入院するほど悪いんですか？」

「……残念ながらね」

女性の声が沈む。私の心も沈んだ。

他の女の子であれ、彼の子ともなのだ。その子の妊娠に大きな問題がある。なぜか、ざまあみるなんて気持ちにもなれなくて、私はしばらく言葉を搜した。

そして結局、口にできたのは

「あの、こんな所で座ってていいんですか？ お体に障るようでしたら、もう戻ってください。彼も心配すると思います」

そんな言葉だった。「え？」と女性が顔をあげる気配がしたので、私も顔を見る。

綺麗な人だと思った。彼に少し似ているとも思った。

そう、影のような私と違い、光の似合うようなところが、とても似ている。

「彼の赤ちゃんですよ。元気に産んであげてくださいね」

声は震えていた。でも、そう言えた。そんな自分に私は安心して、席を立とうとしたときだった。

「え、あなた、もしかして」

女性が笑い始めたのだ。口元に手こそお上品にあてているが、肩を揺らし、その笑いはしだいに大きくなっていく。

私は混乱し、そして今度こそ怒りを覚えた。

なんだ？ 人がせつかくここまで譲って、そっちのことを思っていたのに。笑うなんて失礼にもほどがあるんじゃないのか？

「あなたね」

いい加減、むかついて、何か言ってやろう。そう思った私の言葉を、女性が奪った。

「違うの。ごめんね。うふふ」

女は笑いを納めるように深呼吸するが、すぐにはうまくいかないようだった。幾度目かの「違うの」の後に彼女は顔をあげると、こう告げた。

「私はあの子の姉なのよ」

「え？」

「お腹の子は、主人との子ども。これ、本当よ」

ちよつと冗談めかしてそういうと「もう、びっくりした」と太陽のような笑みを浮かべ、水を一口飲んだ。

私は呆然として、その姉と名乗る妊婦を凝視する。

自分の憶測が間違いだった。それが明確になり始め、少し軽くなってきた心に、違う角度から突風が吹く。そしてそれは先ほどよりも分厚く重い雲をつれてきた。

私の顔は、目の前のお日様のようなお姉さんの笑顔とは対照的に、どどん曇っていく。

「って事は……」

「あの子ったら、本当になんにも話してこなかったのね」

そこでようやくお姉さんは笑顔を引っ込め、真剣な顔になると、両手を組んだ。

まるで弟の悪戯を代わりに謝るように、私に告げた。

「入院しているのはあの子なのよ。そして、たぶん、残された時間はそう、長くはないわ」と。

病室に駆けつけた私に気がついたとき、彼はこれまでに見せたことのない、泣き笑いの顔を見せた。

真っ白な壁に、真っ白なカーテンに、真っ白なシーツ。それより白い彼の顔がそこにはあった。

たぶん、お姉さんが飾ったのだろう、花瓶に生けられた花束だけが鮮やかな色彩を放っていて、私はまるで悪い夢でも見ているかのような気分になる。

「ごめんな」

でも、彼のその一言で、これは現実なのだと知らされた。

いつも私を励ましてくれた彼。いつも大丈夫だといってくれた彼。

きつと、このことを話せば、ネガティブな私は、死にそんな自分よりも死にそうな顔をすることになるだろう。そう思っただけには言えなかったのだ。

彼は何にも言わなかったが、私はそうじゃないかと思った。

だから、泣き笑いの彼をただ、黙って抱きしめた。

抱きしめて、それから約束した。

「私、絶対に泣かないから。だから、傍にいらさせて」

それから、病院に通う日々が始まった。

彼の病気が見つかったのはたった三週間前。風邪だと思い、受診した時に発覚した。

若さがかえって仇となり、進行は早く、すぐに入院を余儀なくされた。

日に日に吐き気や痛みが増し、食欲が落ちて、痩せていく。そんな彼を見ながら、私の方がため息をついこぼしてしまうことも、しばしばだった。

でも、彼はその度に私にいつも笑ってこういうのだ。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるって」

ある日、彼はベッドの上でカメラをいじっていた。

花瓶の水を替えから戻ってきた所だった私は、いきなりレンズを向けられて、驚いた。彼はそんな私を見て、いたずらっ子のような顔で笑ってから、いとおしそうにカメラを両手で抱えたまま呟いた。

「俺たちはまるでカメラだな」

「なに？ それ」

「ほら、ネガと」

私を指差す。

「ポジ」

今度は自分だ。

私は苦笑して「なにそれ」。ひどいながらも、花瓶を彼の傍に置いた。彼も同じように苦笑しながら、今度はその花にレンズ

を向ける。シャッターを下ろすと、花瓶の傍の鏡にフラッシュの光が反射した。

「でもさ。ほんと、そんな感じだよ」

「どうせ、私はネガティブですよ」

「いや、君だからこそ、僕のネガって意味」

「なにそれ」

私はまたそういつて笑った。彼もそんな私に笑顔を向けた。

その言葉の意味はわからなかった。ただ、意味がわからなくても、たとえ意味がなくても、一緒にいて笑ってられる。その事実が何よりも大切に、ただただ嬉しかった。

そんな風に彼は、つらいのは自分のほうのくせに、どんな時も影の私を照らそうとしてくれてたんだ。

そう、最後の最後まで……。

彼の意識は次第に薄れていった。痛みと苦しみを和らげるために、麻酔の量を徐々に増やしていくことを、家族が医者と相談して決めたのだ。私としても異論はなかった。苦しみから彼を少しでも解放してあげたかった。

ただ、彼が眠りにつくのをみる度に、もう目を開けることが今度こそないのではないかと心配し、己の心臓が止まってしまいたいようなほどの痛みと苦しみを感じていた。

そんな時は彼の温もりと鼓動を確かめるために、ぎゅっと手を握った。

彼の体温と脈に触れると、私は安心した。

大丈夫、大丈夫

鼓動のリズムが、そう言ってくれているような気がした。

人間は誰しもいつかは死ぬのだ。

大切な人も例外ではない。

自分が死ぬか相手が死ぬか、とにかく大切なものを失うのは、どちらにしろ始めからの決定事項であり、どうしようもないことなの

だ。

ただ、日々の中、意識するのには余りにもつらすぎて、人は見ないふりをする。知らない、気がつかないふりをして、いつの間にかそんな事が起こることさえ忘れてしまう。

本当は特別なことじゃない。当たり前のことなのだ。

当たり前のことを忘れているから、そして、相手が特別な存在だから、こうやって死が目前に迫ったとき、人は慌てふためき嘆くことしかできなくなるのかもしれない。

外は梅雨空が天を覆い、昼間なのに夜のように暗かった。

しとしと降り続ける雨は、途切れることの許さない不安を掻き立てるようで、不快だった。

もしかしたら、永遠にこの雨は降り続けるのではないかとすら思った。

このまま、日の差すこともなく、雨の中に世界が沈むのではないか……。

耳に何かの掠れる音がした。

私は慌てて顔を上げた。

彼の唇が微かに動いた気がした。

それは、いつもの、あの言葉で……。

電子音がせわしないアラームを声高に叫びだす。

さっきまでお行儀よく行進していた心電図が、急に反乱を起こし始める。

病室にたくさんの人が入ってきた。

私は弾き飛ばされた。

さっきまでの静寂が嘘のように破られ、彼の周りで人々が忙しく蠢き始める。

私はその様子をぼんやりと部屋の隅で眺めてから、そつと外に視線を投じた。

雨が上がって、遠くのほうで切れた雲間から光が一筋降りてきているのが見えた。

幽霊坂はまだ続いていた。

もはや体力の限界だと、私は滝のように流れる汗を拭い、膝に両手を当ててかがみ込む。

彼がいなくなってから、形見分けにとカメラをお姉さんからもらった。

彼が息を引き取って、まもなく出産を果たしたお姉さんの表情は複雑で、でも凜としていた。

きつと、早くに幕を下ろした弟の分も新しい命とともに生きていく、そんな覚悟と強さが彼女にはあるのだろう。

そして、カメラを私に託したというのは、きつと……。

「見抜かれてたのかな」

私はそつと胸の前にぶら下がるカメラを見つめた。

彼のいない世界は真っ暗だった。

あの梅雨の雨は、まだ私の世界を覆い降り続けている。

あの人が言った。

私と彼はネガとポジ。

つまり、二人で一つなのだ。

光を失った影は、闇の中を彷徨うしかない。

「ごめんね」

だから、このカメラに彼との約束を果たしたら、彼の元へ行こうと思っていた。

夏休みを利用し、私は彼のカメラとともに、二人で行った場所を一つ一つ尋ねては、フィルムに焼き付けていていた。

そして、幽霊坂の上。

去年、二人できて、町を見下ろした、その場所が最後だった。

眩暈がする

吐き気を感じる

膝は震え

暑さに朦朧とする

でも、私は行かないといけない。

全ての始めが終わりに向かうように、彼との思い出の旅はもうすぐ終わる。

そして、私も……。

重い足を引きずるように一歩前に出した。

顔を上げる。

さつき見えた黄色いものが向日葵の花だと、今度ははっきりわかった。

そう、たしか、幽霊坂の上は広い広い原っぱだ。去年もあそこで確か、向日葵が揺れていた。

その傍で微笑む彼を見て、私は「ああやっぱり彼には光が似合う」と思ったんだっけ。

風が吹く。

向日葵が揺れる。

風が吹く。

私の火照った頬を撫でていく。

風が吹く。

影が地面に刻まれる。

風が吹く。

私の背を押すように。

そして、私はとうとう頂上までたどり着いた。

目を見張る。

幽霊坂を越えた、丘の上。

広い広い広大な原っぱに、光が、太陽が満ち溢れていたのだ。

私はただただ、その突如現れた無数の太陽の海に、言葉もなく立ち尽くす。

向日葵が無限に続くその場所は、もし、彼の天国があるのだとしたら、きつとこんな場所なんじゃないか。そんな事を考えたときだった。

「大丈夫」

声がした。

私は慌てて目を凝らした。

向日葵の群れのそのずっと奥。黄金の波の向こう。

そこにいたのは……

「そんな」

彼だ。彼はいつものあの笑顔を浮かべ、こちらを見ていた。

「大丈夫、大丈夫」

耳に聞こえるのか、頭に直接響いているのかわからない。ただただ聞こえてくるその声にむかって、私は叫んでいた。

「大丈夫なんかじゃないよ！ 無理だよ！」

彼の元へ駆け寄ろうとする。でも、たくさんの向日葵の花たちが邪魔をして、簡単に彼の元へ辿り着かせてくれない。

「大丈夫だよ」

「そんなことない！ 言っただじゃない！ 私はネガで、あなたはポジなんですよ？ 私、貴方がいないと」

彼が首を横に振った。

「君がいてくれたら、僕は蘇られる。何度でも、何度でも」

「そんな！」

意味がわからない。私はお姉さんのように、命を宿せたわけでもない。あなたがいないと前を向くことすらできない。そんな私が、いつたい、どうやって……

「お願い！ 私と一緒に逝かせて！」

彼はやはり首を横に振った。そして、そっと静かに指差した。何を？ と思えばカメラだった。

「君だから、大丈夫。なんとかなるから」

声が急速に遠のいていくのを感じた。私は慌てて顔を上げ、手を突き出す。

彼の姿が真つ白な光に消えていくのが見えた。

私は向日葵の花を乱暴に掻き分け、彼に駆け寄ろうとする。でも、でも、私の手はその光の端にすら届かなくて……。

「待ってーっ！」

最後に目がくらむほどのまばゆい光が輝いて、視界を奪った。

静寂があたりを覆う。

強い風が吹いた。

向日葵たちがさんざめく。

私は目を開けていられなくなり、両腕で顔を覆うと、彼の名を一度、声の限り叫んだ。

視界が戻ったとき、私はただの草原に一人、立っていた。

「どうして」

向日葵もなにもない。真夏の太陽が照りつける、雑草ばかりが生い茂る草原だ。

私は涙にぐしゃぐしゃになった自分の顔を拭おうと、タオルに手をかけた。

そのとき、何かを自分が握っていたことに気がつく。

覚えのない、紙切れに私は首を傾げた。

翻す。それは……

「写真」

たぶん、ネガとポジの話をした時の写真だ。

花瓶を整える私と、その向こうにある鏡に映るカメラを構える彼の姿。それが一緒にフレームに収められたものだった。

私の横顔は疲れ、彼の顔は痩せこけている。

でも、でも、それは確かに私たちが最期まで一緒にいた証で……「そうか」

彼が言った意味がようやく理解できて、私はその写真を握りしめ

ると小さく笑みをこぼした。

私がネガで、彼がポジ。

つまり、私の中に焼き付けられた彼は何度でも何度でも再生することができる。私が生き続ける限りは。

空を見上げた。

そこにはもう、梅雨のかけらもなく、真っ青な夏空。

幽霊坂の話は本当だったね。

私は彼にそう心の中で語りかけながら、目を閉じ、こつ唱えた。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなる」

私の声は草原を駆ける風に乗し、空高く太陽の傍まで舞い上がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9486h/>

幽霊坂の向日葵

2010年10月8日15時50分発行